MEMENTO=VITA VESTIGIA VITAE

ARCHIVE
// 003

オペレーター

クララ

Operator
Clara Valen
Age / 20

自分では
決して届かない高さ
その景色は特別だった

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。

キャラクターブック

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

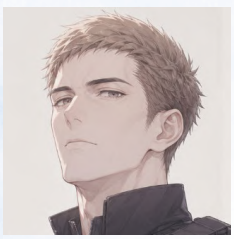


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

6～9歳

父の背中の上から、夕暮れの街を眺めるのが好きだった。
幼い私にとって、その景色は特別だった。自分では決して届かない高さ。
父に背負われているときだけ見ることのできる、世界。
オレンジ色に染まった街並み。遠くに伸びる道路。帰り道を急ぐ人々。
そして、背中越しに感じる父の体温と、どこか安心する匂い。
その温もりに包まれていると、どれほど好きな景色を見ていても、やがて眠気には勝てなくなる。
いつの間にか私は眠ってしまい、そして目が覚める頃には、いつも同じ目線に戻っていた。
――車椅子の高さに。

私は、生まれつき体が弱かった。
先天的な神経・筋肉系の障害があり、歩くことができない。
私の意志は、下半身に届かなかった。だから私は、ずっと車椅子の上で生きてきた。
「クララ、ごめんね……。元気な体で産んであげられなくて……ごめんなさい」
母――セレナは、いつも泣きながら私を抱きしめ、何度もその言葉を繰り返した。
母が泣くと、私まで泣きそうになる。そんな自分が、私は嫌だった。
そして何より、その言葉を聞くのがつらかった。だって、友達が言っていたから。
「私のママはね、こう言ってくれたんだ。“生まれてきてくれて、ありがとう”って」
――それが、うらやましかった。
母の言葉を聞くたびに、私は不安になる。
私は、本当に生まれてきてよかったのだろうか。
祝福されるべき子どもではなかったのだろうか。
ただ一度でいい。“生まれてきてよかったんだ”そう思いたかった。

それからもう一つ、幼い私には、うまく言葉にできない怖さがあった。誰かが私に優しくしてくれるたび、その優しさの向こうで、その人が何かを犠牲にしているような気がしたのだ。

ある日、母に連れられて近くの公園へ行った。
そこには、同じ年頃の子どもたちが何人か遊んでいる。私は少し離れた場所から、それを眺めていた。
鬼ごっこをしている子たちは、みんな楽しそうに走っている。私にはできない遊びだった。
そのうち、一人の女の子が私に気づいて、声をかけてくれた。
「クララちゃんも、上の広場に行こうよ。景色がすっごく綺麗なんだよ」
公園の奥には、小さな坂道があった。車椅子でも行けないことはない。
けれど、私一人では登れない。母が押そうとしたとき、その子は笑って言った。
「私が押すよ」

坂道は思ったより急だった。女の子は息を切らしながら、何度も足を踏ん張ってくれた。
手のひらが赤くなっているのが見えた。途中で、ほかの子どもたちが先に走っていく。
「早く来ないと、鬼ごっこ始めちゃうよ！」
女の子は振り返って、「先にやってて！」と答えた。
笑っていた。けれど、その声は少しだけ寂しそうに聞こえた。

上の広場に着いたとき、景色は本当にきれいだった。私は嬉しかった。
嬉しかったはずなのに、隣で汗を拭いているその子を見ると、胸の奥が少し苦しくなった。
「ごめんね。私のせいで、遊べなかったよね」
そう言うと、その子は首を振った。
「いいよ。クララちゃんのためだもん」
その言葉は嬉しかった。だけど、私はうまく笑えなかった。

誰かが私のために何かをしてくれるのは、きっと温かいことだ。
けれど、その代わりに、その人がやりたかったことを犠牲にしているのだとしたら。私が嬉しい分だけ、誰かが少し苦しくなるのだとしたら。それは、本当に喜んでいいことなのだろうか。
その日から私は、少しだけ考えるようになった。
私のために、誰かが何かを犠牲にしていないだろうか、と。

そんな私が、何も考えずに笑えた時間があった。父――アレクの背中にいるときだった。
父は、いつも私を笑わせてくれた。父は、私が生まれたことについて何も語らない。
謝ることも、悲しむこともない。ただ、私を楽しませようとしてくれた。
よく父は、私を背負って外へ連れ出してくれた。家の前の道や、公園、少し遠くの広場まで。
私の足では決して行くことのできない場所へ、父は当たり前のように連れていってくれた。
けれど、父はいつも「クララのために」とは言わなかった。
「今日は、父さんが夕焼けを見たいんだ。付き合ってくれるか？」
そう言って、私を背負うのだ。私はそれが少し不思議だった。私が連れていってもらっているはずなのに、父はまるで、自分が行きたい場所に私を誘っているみたいだったから。

ある日、父はふいに言った。
「クララ、今日は特別だ。しっかりつかまっていろ」
そう言うと、父は私を背負い、そのまま走り出した。最初は驚いた。だけど、顔に風が当たる。
髪が揺れる。景色が流れていく。こんな経験は初めてだった。
私は走れない。歩くこともできない。でも、このときだけは、自分が走っているような気がした。
「どうだ、速いだろう！」



父は振り返りながら、得意げに笑った。
「もう一回！もう一回！」
私がそう言うと、父は汗を拭きながら言った。
「体育会系ではないんだ……ちょっと、体力が……。でも、あと一回だけだ」
そう言いつつも、父はまた走り出す。そして本当に、一回だけ走ると、その場に座り込んだ。
「今日はここまで。これ以上やると、父さんが明日動けなくなる」
父はそう言って笑った。私は慌てて謝った。
「ごめんね。私のために……」
すると父は、少しだけ困った顔をした。
「違うよ、クララ。父さんは、クララのためだけに走っているわけじゃない。父さんはね、クララが笑うところを見るのが好きなんだ。それに、クララを背負っていると、いつもの道も少し違って見える。父さん一人なら、きっとこんなに夕焼けを見ようとは思わなかった」
父は、私の目を見て、優しく微笑んだ。
「父さんも、クララと過ごす時間が楽しいんだ」
その言葉を聞いて、私は少しだけ安心した。父の背中にいる時だけは、不安を忘れることができた。
父は、私と同じ景色を楽しんでくれている。そう思えたから。

そんなある日のことだった。突然、胸に強い痛みが走った。息がうまくできない。
体の奥が、ぎゅっと締め付けられる。私は、その場で倒れてしまった。
そばにいた父が、すぐに私を病院へ連れていった。長い検査のあと、その日は父と一緒に家へ帰った。
その夜。私は、父と母の会話を――偶然、聞いてしまった。

「クララの診断結果が出た……」
父の声は、いつもより低かった。
「事情を話したら、私にも教えてくれた。クララの心臓に、大きな病気が見つかったそうだ」

少しの沈黙。そして、父は続けた。
「医学的に治療する方法はない。二十歳までは……生きられないかもしれない、と」
母は、その場で崩れ落ちそうになった。だけど私は、よくわからなかった。
二十年という時間が、どれほど長いのか。そして、どれほど短いのか。私は…まだ知らない。
母は父にすがりつき、泣き叫んだ。
「私が……私の心臓を、あの子に移植すれば……助からないの！？」
父は、強く言い返した。
「あの子はまだ小さすぎる。それに、クララを置いて君が死ぬというのか！？そんなことが許されるわけがないだろう！それに、そんなことをして、クララが喜ぶと思うのか？」
心臓の移植。つまり――母の命を使って、私を助けるということ。だけど。それは、違う。私は、そんなこと望んでいない。だから、ちゃんと伝えなくちゃいけないと思った。私は車椅子から手を伸ばし、ゆっくりと扉を開けた。二人が驚いて振り向く。そして、母のそばまで近づいた。

「私は、嫌だよ……お母さんの命をもらってまで、生きるなんて嫌だ」
私はそう言って、父と母の手をそれぞれ握った。
「私の願いは、いつだって一つだよ」
二人の手を強く握る。
「お母さんと、お父さんと、私。三人で幸せに暮らせれば、それでいい。そこに、お母さんがいないなんて嫌。ただ…みんなで笑って暮らしたい。それって…そんなに難しいことなのかな？」
母は私を強く抱きしめ、また謝った。私は困ったように父と顔を見合わせる。
父は何かを決意したように、私たち二人を抱きしめて言った。
「私が、必ずなんとかする。セレナ。かつてのように……私の研究を手伝ってくれないか？」
そして父は、私に言った。
「少し時間がかかるかもしれない。だけど、必ず――クララの願いを叶えると、誓うよ」
父は、それから研究を始めた。母も、昔は同じ分野の研究に関わっていたと聞いたことがある。
だから私は、父の言葉を疑わなかった。父と母、二人ならきっと――。

１０年前（１０歳）
2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が締結された。
両者による連合組織《ユニオン》が発足する。だがそれは同時に、第二次アンドロイド戦争の幕開けでもあった。過激派アンドロイドとの全面衝突。多くの生命が失われ、彼らが保有していた大量破壊兵器によって、地上は急速に汚染されていった。
私は両親に連れられ、統合生存圏へと避難した。そこは戦争を生き延びた人類が集められ、生活のすべてが一元管理される巨大な居住区だった。外縁では、人類を守るための防衛線が今も維持されている。私たちが暮らしていたのは中央付近。比較的安全な区域だと教えられていた。

やがて、穏健派アンドロイドが秘密裏に建設していた地下シェルターが、人類へ提供されることになった。地上の劣悪な環境に耐えられない人々から優先的に移住が進められ、移住は段階的に行われていった。私たち家族は、第三次移住者だと聞かされていた。

――だが、その日。事件が起きた。
地下シェルターへ避難していた第一次移住者と第二次移住者。あわせておよそ三千万人が命を落としたという。公式発表では、地下シェルターの防衛システムが過激派アンドロイドに掌握され、内部に備えられていた銃火器が暴走。それにより、多くの犠牲者が出たとされていた。
この惨劇は、《シェルター制御喪失事件》と呼ばれることになる。
家族は胸をなで下ろしていた。――巻き込まれなくてよかった、と。

やがて、地下シェルターへの移住が再び始まった。
内部の防衛システムはすべて撤去され、その代わりに、入口の防衛だけが徹底的に強化された。
移住は完了し、私たち家族にも居住区画が与えられた。そこが、私たちの新しい家だった。
それでも私は、どこか寂しさを感じていた。
前の家に残してきた思い出を、この場所へ持ってくることはできなかったからだ。
いつかまた。私たちが暮らしていたあの家に、家族で帰れる日が来ればいい――私は、そう願っていた。

８年前
父の研究部屋は、いつも夜遅くまで電気がついていた。
扉の向こうから聞こえてくる声を聞いていると、研究はあまりうまくいっていないようだった。
父は焦っていた。あの日から、父は昔のように遊んでくれなくなった。それが、少し寂しかった。
でも、文句は言えない。だって父は、私のために寝る間も惜しんで頑張ってくれているのだから。

ある日、父は私をとある施設へ連れて行った。そこは孤児院。
親を失った子どもたちが、たくさん暮らしている場所だった。父は施設の男性と話を始めた。
「少しここで待っていてくれ」
そう言って、父は奥へ消えていった。

私は一人で車椅子を押して、廊下を進んでいた。
そのとき、声をかけてくれたのが同い年の少女――バーバラだった。
「ねえ、車椅子なんだ」
明るい声だった。悪気はまったくない。純粋な興味だろうか。私は少しだけ戸惑った。
けれど、バーバラはすぐに笑った。
「ここ、迷路みたいでしょ？案内してあげる」

そう言って、バーバラは私の車椅子を押し始めた。
「こっちからね、庭に出られるんだ」
バーバラは歩きながら、次から次へと話してくれた。ここでの暮らしのこと。好きな遊び。好きな食べ物。まるで昔からの友達みたいに、何でも話してくれる。気がつけば、私は笑っていた。時間を忘れるくらいに。こんなふうに誰かと話すのは、本当に久しぶりだった。

それから父は、何度も私をその施設へ連れて行った。父が男性と話している間、私は孤児院で待っていた。そして、その時間はいつの間にか特別なものになっていた。バーバラがいるからだ。
会うたびに、私たちは自然と一緒に過ごすようになった。
バーバラは庭を走り回り、遊びながらも、よく私のところへ戻ってきた。
「クララちゃん、こっち来て！」
そう言って、私の車椅子を押してくれる。
気がつけば私は、バーバラに会える日を楽しみにするようになっていた。

そんなある日、私たちはいつものように庭で会話をしていた。やがて、将来の夢の話に。
「私、勉強するの好きなんだ。だから大人になったら……誰かの役に立つことをしたい。心とか、気持ちとか……そういうのを助ける仕事」バーバラは楽しそうに笑っていた。
「クララちゃんは？将来なりたいものってある？」
将来の夢。私は、父と母と三人で暮らせれば、それでいいと思っていた。
それ以上の未来なんて、考えたこともなかった。だって私は――。そのときだった。
「あっ、ごめんね。今日は用事があったんだ」バーバラは慌てて言った。
「また来るよね？お話の続きは、また今度ね」そう言って、走っていった。
私はその場に取り残された。少しして、父の声が聞こえた。
「帰ろうか」私は静かに頷いた。

私の命は、あと８年しか残されていない。
気がつけば私は残された時間を数えるようになっていた。最初は、なんとなくだった。
今日という一日を終える。そしてまた、次の日が来る。
そのたびに、残りの時間が一日ずつ減っていく。
日付が減るたび、胸の奥で何かが静かに削れていくような気がした。
私はまだ「死ぬ」ということが、本当はどういうことなのか、よくわかっていない。
けれど、ひとつだけわかることがあった。
みんなが当たり前のように迎える未来を、私は途中までしか歩けない。
バーバラが大人になる頃には、私はもう、この世界にいない。
――私は、彼女と一緒に大人にはなれないんだ。

翌週、また父に連れられて孤児院へ行った。父が男性と話している間、私は一人で待っていた。
そして思った。今日は、バーバラに会うのが少し怖い、と。そのときだった。
バーバラが元気に走ってきた。もう一人、知らない女性を連れて。
「初めまして。私はルピナスと言います。あなたのお名前は？」
私の目線に合わせて、彼女は優しく微笑んだ。私は名前を伝えた。するとバーバラは言った。
「ルピナスはとっても優しい、アンドロイドなんだよ」
話を聞くと、ルピナスはセクター・ヴィータと呼ばれる場所から、ときどきこの孤児院を訪れるのだという。

その日、私たちは三人で話をした。ルピナスが私の車椅子を押してくれる。
バーバラは彼女にとても懐いていた。そしてバーバラは、ふと思い出したように言った。
「そうだ！この前聞きそびれちゃった」バーバラは笑いながら言った。
「クララちゃんの将来なりたいものって、なに？」
その言葉に、私はうつむいた。なんて言えばいいのだろう。そんな私に気づいたのか、ルピナスが私の手をそっと握った。「大丈夫？」その手は温かかった。アンドロイドとは思えないほどに。
私は胸の奥につかえていた言葉を、ゆっくりと吐き出した。
「私ね……二十歳まで生きられないの。心臓に病気があって……だから、私に将来なんてない」
気づけば、涙がこぼれていた。誰にも弱音を吐けなかった。
そのせいかもしれない。バーバラは慌てたように、ハンカチを差し出してくれた。
「私ね……毎日、不安なんだ。眠るたびに、残りの時間が減っていく気がする。朝が来るたびに、終わりが近づいてくるみたいで……。最近ね……生きていることが怖いの」
少し間を置いて、私は言った。
「いっそ……早く終わっちゃったほうが、楽なのかなって」
その瞬間だった。
「そんなこと言わないで！」バーバラは唇を噛みしめていた。
「私ね、お父さんとお母さんが死んだの。今でも、ずっとつらい。大切な人がいなくなるのって、本当につらいの。せっかくお友達になれたのに…クララちゃんがいなくなるのは、嫌だよ」
私は、あのときのことを思い出した。母の心臓を使って、私を助けるという話。
私は、それを望まなかった。
生きていても、そこに大切な人がいないのが――嫌だったから。
なら……私は、この恐怖とどう向き合えばいいのだろう。すると、彼女は言った。
「私、決めた。恐怖心を消す研究をする！クララが怖くなくなる方法、私が見つける」
その表情は、父が見せたことのある顔だった。何かを決意した人の顔。
だからこそ、私は信じたいと思った。父の想いを。バーバラの想いを。
そう思うと、胸の奥の不安が、ほんの少しだけ和らいだ気がした。

やがて、父と母はセクター・ヴィータの職員として迎えられることになった。孤児院で父と話をしていた男性は、セクター・ヴィータの統括官だったのだという。どうやら彼は、父の研究に目をつけていたらしい。将来的に軍事利用されることを条件に、父の研究には資金が提供されることになった。

そして――バーバラも、私たちと共にセクター・ヴィータへ移ることになった。
ルピナスが言ったのだ。「彼女の想いを、私が実現できるよう支援します」と。
私は、ただ待つことしかできない。けれど――少しだけ、未来を思い描ける気がした。

５年前
父の研究は、この施設の支援によって、ようやく動き始めていた。《託生者創造計画》。
それが、この研究の名前だと教えてもらった。今日は、託生者について父から説明があった。
最初に聞いたのは、心臓の話だった。私の心臓の代わりに、アンドロイドのコアを移植する。
それによって生命維持を可能にする――そんな研究だという。それで生きられるなら、それでもいい。
最初は、そう思った。けれど父は、それでは納得していなかった。
「心臓だけ治しても意味がない」父は静かに言った。
「クララの体は、神経系にも問題がある。心臓が動いても、歩けるようにはならない」
私は生まれつき、体の半分が自分のものではないような感覚で生きてきた。
意志を送っても、下半身は応えてくれない。父は長い沈黙のあと、ようやく口を開いた。
「……だから、別の方法を考えた」それが――託生者だった。

アンドロイドのコアに、私の記憶を移す。そして、今の肉体を捨て、新しい身体を生成する。
そうすれば、私は記憶を保ったまま、新しい身体で生きられる。父は、どこか必死な声で言った。
「クララ……君は歩けるようになる。走れるようにもなるんだ！」
父はきっと、この数年間、ずっと答えを探し続けてきたのだろう。残された時間の中で。私を救う方法を。だから――きっとこれが、父の出した最善の答えだった。
それでも、私はどうしても聞かずにはいられなかった。
「……お父さん。託生者になるとき、私は今の体を捨てるんだよね。記憶は残る。思考も残る。同じ構造の身体も作れる。でも、それって……本当に今の私なのかな？」
父は答えなかった。私は続ける。
「昔、お父さんが教えてくれたよね。スワンプマンの話」

それは哲学の思考実験だった。
ある人間が雷で消滅し、まったく同じ構造、同じ記憶、同じ外見の存在が偶然生まれたとする。
それは――本当に“その人”なのか。という内容だ。
父は昔、こう言っていた。

「私は同一人物とは思えない。なぜなら、存在というのは、記憶じゃなく生きてきた過程そのものだからだ」
託生者……それは、私の記憶を持った別の誰かなのだろうか。父は答えなかった。
きっと、気づいていたのだ。私が今、同じ疑問に辿り着いたことに。父は視線を落とした。
だが、残された時間の中で、父は何度もこの問いと向き合ってきたのだろう。
そして――それでも、この答えを選んだ。かつて自分自身が否定した答えを。
しばらく沈黙が続いた。そして、私は静かに言った。
「……私、やるよ。お父さんの研究を否定したいわけじゃない。それに――これは、私のためでもある」
このまま、何もできずに諦めたくない……。私は、不安を押し隠すように笑ってみせた。
「歩いてみたいんだ。一度くらい」
私は、その実験を受けると決めた。

その日、私はバーバラと会った。私が、これから受ける実験のことを話すと、バーバラは少しだけ真剣な顔になった。でも、私の気持ちや決意を伝えると、すぐにいつものように笑った。
「大丈夫。クララが実験する頃には、きっと完成してる」
バーバラはそう言って、胸を張った。
「恐怖心を消す研究。順調なんだ。だから安心して。クララが怖がらなくていいように、私がちゃんと間に合わせる」
その言葉は、まるで約束みたいだった。彼女のその想いが、ただ嬉しかった。

3年前
私は被験者として、その実験を受ける。その前日、私はルピナスの部屋を訪れていた。
《託生者創造計画》で使用されるアンドロイドのコア。それについて、聞きたいことがあった。
「ルピナス。アンドロイドのコアって……複製できるの？」
ルピナスはすぐには答えなかった。思考するような仕草を見せる。そして、静かに言った。
「禁忌ですが……技術的には可能です。同じ記憶を持ち、同じ意志を持つ存在を作ることもできます」
アンドロイドのコアは、人間に例えるなら心臓……。さらに、コアにはそのアンドロイドの記憶情報も存在すると聞いたことがある。私は、胸の奥に引っかかっていた言葉を口にした。
「私のために使われるコア……それって、誰かの命みたいなものなんじゃないかって思って。昔、お母さんに、心臓を提供されそうになったの。でも、嫌だった。誰かが犠牲になって。それで私が生きるのって、どうなんだろうって」
ルピナスは、少しだけ驚いたような顔をした。それから、小さく頷いた。
「なるほど。クララにコアを渡す前に複製すれば、そのアンドロイドという存在は消えない……そう考えたんですね」
私は黙って頷いた。ルピナスは、少しだけ微笑んだ。

「クララは優しいですね…。でも、安心してください。アレクから新品のコアを用意してほしいと頼まれました」
その言葉を聞いたとき、胸の奥に張りつめていたものが、少しだけほどけた。

実験当日。私は事前に、眠くなる薬を飲まされることになっていた。そのあと、実験室で全身麻酔をかけられるという。実験の内容は、脳にある記憶をコアへ保存するというものだ。具体的な方法は父も詳しく話してくれなかった。ただ――眠っている間に終わる、とだけ。私を安心させるためだろう。
その睡眠薬を部屋まで持ってきてくれたのは、母だった。
「今日の実験がうまくいけば、理論的には《託生者創造計画》は完成するわ」
母はそう言って、優しく笑った。やがて、約束の時間になると、私は薬を飲まされる。
「クララ……愛している」
そう言って、母は私のおでこに口づけをくれた。やがて、ゆっくりと眠気が広がっていく。
ぼやけていく視界の向こうで、母が私を見ていた。

……真っ暗な世界。やがて、ゆっくりと視界が開いていく。
目の前には、実験室で眠らされ、横たわっている“私”の姿があった。……どうして？
声は出ない。体も動かない。ただ、視界だけがゆっくりと動き、父の姿を捉える。
「セレナ、準備ができた。――始めよう」
セレナ。それは母の名前だった。その瞬間、気がつく。これは――私ではない。
……母の視点だ。次の瞬間、母の感情が胸の奥へ流れ込んできた。

クララ……大丈夫。きっとうまくいく。もうすぐ、約束を叶えてあげられるから。
ふと、娘の言葉を思い出す。それは、クララの心臓の病気が見つかった日のことだった。
「お母さんと、お父さんと、私。三人で幸せに暮らせれば、それでいい」
――みんなで笑って暮らしたい。……あの子は、そう言っていた。けれど、私は笑えていなかった。
この子を、こんな身体に生んでしまったことばかり悔やんでいたから。
だから何度も謝った。そのたびにクララは、困ったように笑っていた。
今ならわかる。あの子は、そんな言葉を望んでいなかった。だけど、私は怖かった。
いつかこの子に、「どうして私を産んだの」そう言われる日が来るのではないかと。
けれど、もしクララが託生者として新しい身体を得られたなら。
遅くなったとしても、ちゃんと伝えよう。今度こそ――。

そのとき、天井の板が外れた。男が一人、そこから飛び降りてくる。
その手には銃が握られていた。すぐに理解した。その銃口が、クララを捉えていることを。
考える暇はなかった。私は反射的に、クララを守るように覆い被さる。――銃声が響いた。

そこで、私は目を覚ました。見慣れた天井。ここは……自分の部屋だった。
今のは、何？さっきの光景が頭に蘇る。怖くなり、思わず息を詰めた。あれは……夢？
そのとき、目の前のモニターが点灯した。そこにルピナスの姿が映る。

「目が覚めましたか。具合はどうですか？」
私はゆっくりと体を起こした。体がひどく重い。さっき見た光景をルピナスに伝える。
彼女は、少しだけ視線を落とした。そして静かに言った。
「……実験中、過激派アンドロイドが一体侵入しました。おそらく、目的は実験の阻止。被験者であるあなたが狙われました。そして……セレナは、あなたを庇い――亡くなりました」
頭が真っ白になった。母が、私を庇って？ルピナスは続ける。
「アレクも重傷です。現在、意識はありません」
言葉が耳を通り抜けていく。理解が追いつかない。
私はベッドから降りようとした。父のところへ行かなきゃ…。そう思った瞬間、体が崩れた。
そこにあるはずの、車椅子がなかったからだ。そのときだった。
右足が、自然と前に出て、身体を支える。すると、ルピナスが静かに言った。
「クララ…。あなたは、託生者となりました。新しく、生まれ変わったのです。自分の足で歩いていける新しい身体に…」

私が、託生者に…？ゆっくりと、もう一歩。左足が床に触れる。……立っている。
私は、ぎこちない足取りで、窓の方へ進む。カーテンを開けると、眩しい光が差し込んだ。
「……歩けた。歩けてるよ……お母さん」
思わず振り返る。けれど――そこに、母はいなかった。現実が胸を苦しめる。息が詰まる。
……この命は、両親によって救われたんだ。――だけど。こんな結末は、望んでいない。
だって、三人で……そう言ったのに。力が抜ける。私はその場で泣き崩れた。
遠くで、ルピナスが私を呼んでいる。けれど――その声は、もう届かなかった。

やがて、父が目覚めた。そして私のもとに訪れてくれた。私を庇って――母は死んだ。
その事実が、時間が経つほど胸に重くのしかかってくる。
私は、父の気持ちなど考える余裕もなく、自分の無力さと苛立ちを、そのまま父にぶつけてしまった。
「どうして、私なんかのために！そんなこと、望んでいなかったのに……」
父は何も言わなかった。ただ、少しだけ俯いていた。
やがて父は静かに立ち上がり、部屋を出ていこうとした。そして扉の前で、立ち止まる。
「お前が望んでいなかったとしても…。クララが生きることを、私たちは望んでいたよ」
その顔は、とても寂しそうだった。私は後悔した。自分の言葉に。
「クララ…、大丈夫ですか？」

目の前のモニターにルピナスの姿が映し出されていた。
……聞かれていたのだろうか。少し、恥ずかしかった。すると、ルピナスは静かに続けた。
「聞いてほしいことが、あるんです。……昔、こんな言葉を教えてもらいました」
「人が生き残るとき、それは“正しいから”ではない。誰かが犠牲になり、誰かが選ばれなかった結果だ。だからこそ、生き残った者は――その重さを忘れてはいけない、と」
私は何も言えなかった。ルピナスは話を続ける。
「今も戦場では、多くの人が亡くなっています。でも、その人たちはただ死んでいるわけではありません。誰もが、守りたい何かのために戦っています。そして私たちは――」
少し言葉を探すようにしてから、続けた。
「その人たちの犠牲の上で、生き残っている。だから、その命を無駄にしてはいけないんです」
私は何も言えなかった。母も――そんな覚悟で、私を守ってくれたのだろうか。
ルピナスは最後に言った。
「クララ。あなたが生きることは、誰かを踏み台にすることではありません」
「託されたものを背負い、前へ進むことです」
私は、ゆっくりと頷いた。胸に手を当てる。かすかな鼓動を感じた。
……この命は、私一人のものではない。
だから私は、進まなきゃいけないんだ。

その後、バーバラが部屋を訪ねてきてくれた。私は彼女に歩く姿を見せた。
ゆっくりと。一歩ずつ。ふと、不安がよぎる。スワンプマンの話を、思い出していた。
もしバーバラにとって、私が“クララ”の記憶を持つだけの別の存在だったら――。
「よかった……本当に」
彼女は、ほっとしたように笑った。そんな心配はなかったのだ。彼女は迷うことなく、私を見ていた。
今までと同じように。……それだけで、少し救われた気がした。

私は話題を変えるように、バーバラの研究の進み具合を聞いた。
恐怖心の研究。私が実験を受けるとき、安心できるようにすると言ってくれていたものだ。
「結局、必要なかったね」
冗談めかして言うと、バーバラは一瞬、顔を伏せた。そして、小さく言った。
「……私、間違ってた。恐怖っていう感情は……消していいものじゃないんだと思う。人が生きるために、必要なものなんだよ」
少し間を置いてから、彼女は言った。
「だから私、研究の方向を変える。人の心に寄り添う仕事をしたい。カウンセラーになろうと思うんだ」
きっと彼女にも、何か思うところがあったのだろう。
けれど、その声はどこか晴れやかだった。

翌日、私は父のもとを訪ねた。もちろん、自分の足で……歩いて。こんな当たり前のことが、こんなにも嬉しいなんて。父は、私に気がつくと、優しく微笑んでくれた。
私は父に、昨日のことを謝った。母が死んだことは、今も辛い。けれど、それを父に見せないように、必死だった。そして伝えた。ここまでしてくれたことへの感謝を。私を託生者として生まれ変わらせてくれたこと。そのすべてに。

そして、私は決意を口にした。母の代わりに――父の研究を手伝いたい、と。母が守った命なら、私はその意志を継がなければならないと思ったからだ。だが、父の返事は――拒絶だった。
「……それは駄目だ。お前は、知る必要などない」
静かな声だった。胸の奥が、きゅっと締め付けられた。
こんなふうに、拒まれるとは思っていなかったからだ。父は小さく息を吐くと、言った。
「すまない、クララ。だが、お前には――お前の人生を生きてほしい。それが、妻の願いでもあった」
少しだけ視線を逸らし、続けた。
「地下シェルターに戻れ。好きなことを始めてもいい。ここは危険だ。……私には、まだやることがある」
私は何も言えなかった。やりたいことなんて、わからない。だって――私には、未来なんてなかったのだから。
父は、それ以上何も言わずに部屋を出ていった。私は一人、部屋に取り残された。
ふと、胸の奥に小さな疑問が浮かぶ。父は――今の私を、本当に“クララ”だと思っているのだろうか。
あの人の目に、私は娘として映っているのだろうか。
……この日からだったと思う。父が、私と距離を置き始めたのは。

私は、自分にできることを探していた。託生者になったのだ。きっと、私にも何か役割があるはずだと信じて。やがて、新たな託生者――ディーンが生まれた。彼のコアには、戦闘型アンドロイドの戦闘技術が記録されていると教えてもらった。戦場へ送り出され、彼は次々と戦果をあげていく。
続いて、グレイも託生者となった。彼もまた、戦場で戦う存在だった。
まるで――彼らと私は、最初から違う存在だったかのように。
私のコアには、何もない。戦う力はない。特別な能力もない。ただ一つ。私自身の記憶だけが、そこに残されていた。それでも――私は、自分にできることを探し続けていた。

そんな私に、声をかけてくれたのは統括官だった。
「クララ。君に、頼みたい役割がある」私は思わず顔を上げた。
「戦場で戦う兵士たちを、セクター・ヴィータから支援するオペレーターだ。通信を通じて、彼らの戦いを支える仕事になる。我々と共に戦ってみないか？」
胸の奥が、熱くなった。……やっと。やっと、自分の役割を見つけた気がしたからだ。

私は必死に勉強した。戦場で戦う兵士たちの命は、通信の向こうで私たちに預けられる。
だから私は、何度も資料を読み返し、戦術を覚え、機器の操作を覚えた。
そんな私をサポートしてくれたのが、統括官の右腕と呼ばれる男――ジェイだった。
ジェイは統括官と共に、この戦争を戦ってきた人物だ。
休憩の合間になると、彼はよく統括官の話をしてくれた。
「統括官は、戦場に娘を送ることには本当は反対だったらしい。本当は、優しい人なんだ」
そう言って、どこか誇らしそうに笑う。きっとジェイにとって、統括官は特別な存在なのだろう。
そんなことを、私はぼんやりと思っていた。
ジェイは、フリッツからの通信を受けると、立ち上がった。
「すまない。任務だ」そう言い残して、部屋を出ていった。私は再び勉強を始めた。
オペレーターとして。いつか、誰かの命を救える日を思い描きながら。

半年前
私は、順調にオペレーターとしての任務を果たし始めていた。最初は、軽い気持ちだったかもしれない。だが、私の判断一つで、誰かの命が失われる場合もある。決して、楽な役割ではなかった。
それでも、これは私が自分で選んだ道だ。気は抜けなかった。

その日、ユニオンの避難民がいる地下シェルターに危機が迫っていた。統合生存圏の中央にある搬入エレベーター。そこが、過激派アンドロイドによる攻撃を受けていたのだ。
もし侵入を許せば、シェルター内部の民間人は――全滅する。
セクター・ヴィータの戦力がすべて投入されることになった。
私は、統括官の指示を各部隊へと伝えていく。そのとき通信が入った。
「こちらエヴァ。敵影多数。想定を上回る規模です。敵は分散配置。搬入エレベーター周辺を捜索しているようです。戦闘は避けられません」
私はすぐに統括官へ報告した。だが――作戦情報の中に、エヴァの部隊の位置が存在していなかった。
私は思わず尋ねた。
「……統括官。エヴァさんの部隊は、どこにいるのですか？」
統括官はしばらく黙った。そして、低く答えた。
「エヴァの所属するアイ部隊は……独立任務中だ」
それ以上は、何も語らなかった。

やがて、アイ部隊のバイタル情報に変化が現れ始める。一人。また一人。
モニターの表示が、消えていく。私は慌てて統括官へ報告した。その瞬間、統括官は通信を開いた。
「……アイか。……増援は送れない。その座標は、……。……渡れば、すべてが終わる……わかっている！
だからこそ、……お前にしか頼めない。頼む……を守ってくれ」

途切れ途切れに、統括官の声が聞こえた。通信が途切れると、統括官は拳を握りしめた。
「くそっ！メメント・ヴィータを使うしか、ないのか…？」
そう呟いたあと、グレイとの通信を開く。
「ここから先、指揮はすべて任せる」
そして統括官は、私に向かってこう言った。
「クララ。グレイと連携しろ。彼が現場指揮を取る」
そう言い残すと、統括官は司令室を出て行った。私は、すぐにグレイと連携をとり始めた。



結果として、防衛は成功した。私は各部隊の状況を確認していく。
ディーンの部隊は、圧倒的だった。
彼は戦場で一度も倒れることなく、ただ静かに敵を制圧し続けていた。私は通信を入れる。
「ディーンさん。敵はすべて殲滅しました」
しばらく沈黙。
「…その、大丈夫ですか？」
ディーンは、以前から様子がおかしい…。
それは、託生者として、多くの死を経験したからだろうか。
「大丈夫だ。統合生存圏中央の搬入エレベーターの防衛は完了した。帰還する」
どこか底の見えない静けさがあった。次に、グレイへ通信を送る。
「グレイさん、敵はすべて殲滅しました。戦場で指揮を取ってくださり、ありがとうございました」
グレイは卓越した情報処理能力で、戦場にいながら的確な指揮を執ることができる。そのため、過去にも現場の判断で多くの命を救った。だからだろうか、統括官がグレイにすべてを任せたのは。
そして翌日。私たちは知らされた。エヴァとフリッツが――託生者になったこと。
そして、ジェイが死んだことを。

３日前

こうして、セクター・ヴィータの託生者は、私を含めて五人になった。
エヴァとフリッツもまた、戦場で戦果を上げていった。
それを見ていると、ふと、考えてしまう。
――私は、託生者として失敗作なのではないか、と。
私の身体は、ただ心臓の病を取り除かれ、健康になっただけだ。それだけの存在。
――私以外の四人は、命をかけて前線で戦い続けている。
その姿を見るたびに、胸の奥に、後ろめたさが積み重なっていく。
これは、ずっと前から感じていたことだ。
だが、託生者の仲間が傷つくたびに、その思いは、さらに強くなっていった。
いつの間にか私は、自分に自信を持てなくなっていた。

その日、統括官から作戦を知らされる。
どうやら一週間後、過激派アンドロイドがセクター・ヴィータを含む全セクターへ同時攻撃を仕掛けるらしい。その情報は、フリッツが事前に掴んだものだという。
私たちにとって有益な情報だった。

事件当日

あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は最大限まで引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは、各セクターへ戦力を分散。
施設内には最小限の精鋭のみが残り、アンドロイド兵はそれぞれの防衛ラインへ送られていた。

私は資料を探すため、研究室にいた。
数日後には襲撃が来る。何かできることはないかと、必死に考えていた。
そのときだった。

研究室の入口に、父の姿があった。
父は私を見るなり、切羽詰まった声を上げた。
「クララ！ 息を止めていろ！」
意味が分からず、問い返そうとする。だが父は答えず、急いで棚の中を探っていた。

やがて、父が私のもとへ駆け寄ってくる。
その手には、二つのガスマスクが握られていた。
「これをつけて、中に隠れていろ！」
父は、ガスマスクを私に手渡す。

次の瞬間、父は私の手を引き、研究室から繋がる小部屋へと私を押し込んだ。
ガシャン、と重い音が響く。私は慌てて扉を叩いた。どういうこと！？
何度も叩く。だが――返事はない。嫌な予感が胸を締め付けた。

私は意を決して、扉に体当たりした。
一度。二度。三度目で、扉が大きく揺れる。
そして――扉が開いた。

「お父さん、どうしていきなり！って、あれ、エヴァさん？ どうしてこんな場所に――」
目の前には、エヴァが立っていた。そして、その横には倒れた父の姿が。
――その瞬間だった。

甘い匂いが、鼻を突いた。視界が揺れる。
床が傾くような感覚。思考が、急速に崩れていく。
そう思ったときには、もう遅かった。
私はその場に崩れ落ち、そのまま意識を失った。

――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。なぜか装着されたガスマスクを外す。
隣に居た父も、意識を取り戻したのか、ゆっくりとガスマスクを外した。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。
「ザザッ……みなさん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【6~9 歳】
・クララは生まれつき足が悪く、**歩けない身体**だった。さらに、**二十歳まで生きられない心臓病**だと知る。**母が自分の心臓を差し出そうとする**が、**クララは「母を犠牲に生きるのは嫌だ」**と拒み、願ったのはただ三人で幸せに暮らすことだった。
【10 年前】
・家族とともに統合生存圏へ避難する。その後、第一次・第二次移住者が巻き込まれた、《**シェルター制御喪失事件**》が発生し、大量の死者が出る。クララたち家族は第三次移住者なので無事だった。
【8 年前】
・父に連れられて孤児院を訪れ、バーバラと出会う。交流を重ねるうちに打ち解け、やがて友人と呼べる存在になる。ルピナスとも出会い、「生きていることが怖い」と悩みを打ち明ける。
・その言葉を聞いた**バーバラは、恐怖心を消す研究を志す**。
【5 年前】
・父から《託生者創造計画》の説明を受ける。**新しい身体を得れば歩けるようになる**と知るが、それは本当に自分自身なのか、と悩む。スワンプマンの話を思い出しながらも、「一度くらい歩いてみたい」という想いから、実験を受けることを決意する。
・ルピナスから、**自分に使われるのは新品のコア**だと聞き、少し救われる。
【3 年前】
・実験当日、**過激派アンドロイドの襲撃が発生**。**クララは母が自分を庇って撃たれる瞬間を“母の視点”で見る**。
・目覚めたとき、託生者となって**自分の足で歩けるようになっていた**が、同時に母の死を知る。
・研究を手伝いたいと申し出ても**父は拒絶し、距離を置き始める**。
・**ディーンとグレイが託生者**となり、クララは統括官に声をかけられてオペレーターになる。
【半年前】
・**搬入エレベーター襲撃事件**の際、オペレーターとして現場支援に入る。
・戦いの末、**エヴァとフリッツが託生者となり、ジェイが死んだ**ことを知る。
【3 日前】
・自分以外の託生者が命を懸けて戦う中で、自分は失敗作なのではないかという思いを深めていく。
【事件当日】
・**研究室**にいたところ、**父にガスマスクを手渡され**、小部屋へ押し込まれる。
扉を開けたところで、**倒れた父とエヴァ**を見つける。その場で意識を失った。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



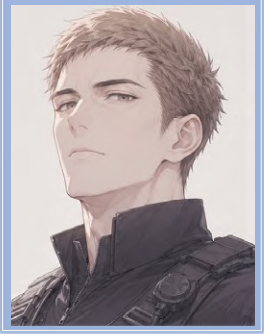
ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分×７人＝14分）
- 投票
- エンディング